

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00199

研究課題名(和文) 倉林誠一郎資料の調査・考証に基づく戦後新劇の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study of the postwar Shingeki (new drama) based on research and historical evidence of Seiichiro Kurabayashi document

研究代表者

後藤 隆基 (Goto, Ryuki)

立教大学・江戸川乱歩記念大衆文化研究センター・助教

研究者番号：00770851

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、倉林誠一郎旧蔵資料のうち、占領期(1947～52年)に書かれた日記のデジタル化・翻刻・考証を実施した。その作業を通して、倉林誠一郎という演劇制作者からみた戦後新劇と同時代文化の動態、制作者という職業の芸術実践における機能・役割、歴史の表層では語られない戦後新劇の裏面史、戦後日本文化における倉林の再評価等について考察した。また、敗戦後の「新劇」が「興行」として商業(大劇場)演劇や映画等との密接な関係を持つことによる経済的優位性、倉林のプロデューサーとしての手腕等が明らかになった。そうした倉林の事蹟を興行史研究に位置づけ、従来の新劇史(観)のパラダイムチェンジを図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

倉林誠一郎日記の翻刻・考証によって、倉林という演劇制作者の事蹟と戦後新劇の動態を明らかにし、作家・演出家・俳優等の創作主体からの視点にとどまらない演劇(史)研究への視角をひらくとともに、演劇という表現を時代・文化の集約点として捉え、社会への影響力の形成過程の解明をめざした。それらは新劇にとどまらず、ひろく戦後日本の演劇界や文化状況に関する問題、さらには今日的な問題へと接続されるものであり、本研究は学際性・今日性という点でも大きな意義を有する。さらに、これまで軽視されてきた、演劇(史)における制作者という機能や経済性という問題の研究を推し進め、広く研究を活性化する契機にもなるといえる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we digitized, transcribed, and analyzed diaries written during the occupation period (1947-1952), which are part of Seiichiro Kurabayashi's former collection. Through this work, we will explore the dynamics of postwar new drama and contemporary culture from the perspective of theater producer Seiichiro Kurabayashi, the function and role of the producer's profession in artistic practice, the behind-the-scenes history of postwar new drama that is not talked about on the surface of history, and postwar Japan. We considered the re-evaluation of Kurabayashi in terms of culture. In addition, the economic advantage that "Shingeki" had after the defeat in the war due to its close relationship with commercial (large theater) plays and movies as "entertainment" and Kurabayashi's skill as a producer became clear. By positioning the history of Kurabayashi in the study of box office history, we sought to change the paradigm of conventional new theater history.

研究分野：近現代日本演劇・文学・文化

キーワード：倉林誠一郎 制作者 占領期 戦後演劇 新劇 興行 日記

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、関連するテーマに実績のある3名の研究者の共同研究として、これまで未整理・未公開のまま措かれてきた、倉林誠一郎(1912~2000)の日記(全79冊。以下『倉林日記』と略記)および手帳等を中心とする旧蔵資料(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵)の調査・考証を行い、演劇制作者(プロデューサー)としての倉林の視点から、戦後演劇の動態を明らかにすることをめざした。

(2)日本演劇(史)研究は、作家や演出家、俳優といった創作主体に関する研究が中心であり、興行の企画運営・制作といった側面からの研究は、未開拓の領域がいまだに多く残されている。日本演劇(史)における「制作者」という職業の実体や機能を検討する上では、興行師(主)や劇場経営者等がその参照項となる。

たとえば、歌舞伎の興行に関する問題については、木村錦花『興行師の世界』(1957)、西山松之助「歌舞伎の興行師」(『日本の古典芸能8』1971)、守屋毅『近世芸能興行史の研究』(1985)、神田由築『近世の芸能興行と地域社会』(1999)等において、江戸、京阪だけでなく、地方の興行師に至るまで論及がなされ、それらの活動の様相が明らかにされてきた。明治期以降における代表的な人物としては、近年、守田勘弥や田村成義に関する研究が進展しており、寺田詩麻「歌舞伎座そして田村成義」(『興行とパトロン』2018)、『明治・大正東京の歌舞伎興行 その「継続」の軌跡』(2019)等が備わる。くわえて、松竹や東宝など大劇場における商業演劇の基盤である興行資本についても、神山彰編『商業演劇の光芒』(2014)、中野正昭編『ステージ・ショウの時代』(2015)、伊井春樹による一連の小林一三研究など数多くの研究が蓄積されている。興行とそれを支える多様なパトロンエージの様相を多角的に考察した神山彰編『興行とパトロン』(2018)も公刊され、徐々に近代演劇における興行や制作等の研究が進みつつある。

(3)しかしながら、本研究で俎上に載せる戦後新劇における興行や制作等の問題については、松本克平『日本新劇史 新劇貧乏物語』(1966)、戸板康二『対談戦後新劇史』(1981)などに同時代人の貴重な証言が収められているものの、それらを後代から捉え返す実証研究はほぼ見られない。また、戦後新劇(史)を体系的に把握し、現代に至る「戦後」を貫く視点を確保した通史的な研究は、大笹吉雄による『日本現代演劇史 昭和戦後篇』(1998)、『同 昭和戦後篇』(2001)、『新日本現代演劇史』全5巻(2009~10)、『日本新劇全史』第1巻(2017)および第2巻(2020)等の一連の祖述に限定される。特に、当該領域において必須の検討課題である、戦後新劇に関する一次資料を用いた実証研究の基盤形成、創作主体と異なる「制作者」という視座に立った新たな演劇(史)研究の提示、「戦後/新劇」の現代に至る通史的な歩みとその変容過程の検討、以上3点を射程に収めた包括的な研究は、ほぼ皆無という学術的背景があり、それらの更新を企図したものである。

2. 研究の目的

(1)本研究の対象である倉林誠一郎は、1946年に劇団俳優座入団後、劇団主事を経て、1981年に俳優座劇場代表取締役役に就任。また、1965年には日本初の芸能実演家の統一団体である日本芸能実演家団体協議会(芸団協)の設立に参画し、戦後新劇(演劇)における実演家の権利保護や文化活動の支援、政策提言等に多大な影響を及ぼした。本研究では、前述した倉林旧蔵資料のうち、とくに倉林が1947年以降、逝去直前の2000年4月までほぼ途切れることなく書き継いできた精緻な日記の調査・整理・翻刻・分析を通して、戦後新劇(史)の実態解明、演劇制作者(プロデューサー)かつ演劇史家としての倉林誠一郎の再評価を行うための基盤形成を図ることを目的としてきた。

(2)『倉林日記』の考証によって、倉林誠一郎という演劇制作者の事績と戦後新劇の動態を明らかにし、作家・演出家・俳優等の創作主体からの視点にとどまらない演劇(史)研究への視角をひらくとともに、演劇という表現を時代・文化の集約点として捉え、社会への影響力の形成過程の解明をめざした。より具体的には、以下6点である。

『倉林日記』の翻刻・分析による戦後新劇(演劇)史の実態解明

「演劇制作者」という職業(存在)の演劇史における機能と位置づけ

倉林誠一郎の戦後文化史における再評価

広義の文化活動に対する影響関係の分析

倉林誠一郎周辺の多分野にわたる人的交流の検討

「後代への影響力」の測定

~ を軸にしながら、上記の諸項目に肉迫することで、戦後新劇の動態と倉林誠一郎の事績を、『倉林日記』の記述期間(1947~2000)である「戦後」を貫き、連続性をもって検討する。

~ の諸項目は、文化・歴史・国際関係等の要素を横断するものであり、また、を中心に、新劇にとどまらず、ひろく戦後日本の演劇界や文化状況に関する問題、さらには今日的な問題へ

と接続されるものである。そのため、本研究の実現は、学際性・今日性という点でも大きな意義を有する目的を持っていた。さらに、上述の成果を提示することで、これまで軽視されてきた、演劇(史)における制作者という機能や経済性という問題の研究を推し進め、広く研究を活性化する契機にもなると考えた。

3. 研究の方法

(1) 本研究では『倉林日記』の整理・調査を行った上で、翻刻およびデジタル化を進め、その考証を進めることとした。とくに、アジア・太平洋戦争直後の1946年に俳優座に入団した倉林誠一郎が、翌年から記述を始めた『倉林日記』のうち、占領期(1946~52年)に焦点を絞って研究を実施した。デジタル化を優先的に進め、研究分担者との資料の共有等を円滑に行うことができた。そうした研究方法を通して、倉林誠一郎という演劇制作者からみた戦後新劇と同時代文化の動態、制作者という職業の芸術実践における機能・役割、歴史の表層では語られることのない戦後新劇の裏面史、戦後日本文化における倉林の再評価等について、既存の戦後新劇(史)研究や倉林の著作等を再検討し、照応することで明らかにする。そうした諸要素の相関関係について、時代・文化の集約点という視座を確保し、包括的に研究対象と設定した。

(2) 『倉林日記』の翻刻・考証を通して、戦後新劇が同時代の文化状況の中で具体的にどのように形成され、変容していったのか、作家・演出家・俳優等の創作主体とは異なる立場にある「制作者」という視座に立つ演劇(史)の様態の解明を研究の範囲とした。その中で、日記の1960年代以降、所謂「アングラ演劇」の登場で、演劇史の「主流」は、戦前からの「新劇」中心から「小劇場演劇」へと移行するように語られる。しかし、「新劇」は現代まで盛衰の中で存続し、重層的な日本演劇史の一角を占めてきた。その基盤が築かれた過程と諸相を研究の範囲と定め、その内実を具体的に明らかにする。また『倉林日記』の調査・考証を順次遂行することで、戦後新劇の動態と倉林誠一郎が果たした役割・機能という、視野の広い研究対象を検討した。

4. 研究成果

(1) 1947~2000年に書かれた『倉林日記』の整理・調査、デジタル化、翻刻を中心に行った。前述のように、占領期(1946~52年)のデジタル化と翻刻作業を終え、判読不明・難読箇所や文中に登場する人物や固有名詞等の確定など、翻刻の精査・内容の考証等を進めた。また、日記の記述と同時代の演劇界の動向や社会状況等を対照するために、日記以外の倉林旧蔵資料や著作、同時代紙誌や倉林以外の関係者の資料等と照応することで、日記の内容を補完する作業も行った。戦後演劇において「新劇」というジャンルが「興行」として商業演劇と不可分であり、その結節点としての倉林という個性の存在が浮かびあがってきた。

(2) 資料保存および効率的な翻刻作業の観点から『倉林日記』のデジタル化を優先的に進め、1970年代までの日記のデジタル化が完了した。本研究課題の終了後も、本研究において対象とした占領期のあと、1953年以降の日記に関する翻刻・考証も継続する予定である。

(3) 倉林が長年、日本芸能実演家団体協議会(芸団協)で数々の政策提言等を行ってきたこと、令和4年が「劇場法」施行10年にあたることから、倉林の事績から現代的課題に接続しうる道を講究するシンポジウム「劇場法は何をもたらしたのか：施行10年とコロナ禍の3年」を開催し、現代の現場の視点から遡行して倉林の思考を探索することもめざした。

(4) 上記の成果の総括として、最終年度にシンポジウム「占領下新劇裏表 倉林誠一郎日記を読む」を開催し、敗戦後の新劇の商業(大劇場)演劇や映画等との密接な関係とそれらを基盤とする経済的優位性、倉林のプロデューサーとしての手腕等について明らかにした。そうした倉林の制作者としての事蹟を興行史研究のなかに位置づけ、従来の新劇史(観)のパラダイムチェンジを図る機会にすることを試みた。くわえて、占領期における『倉林日記』の翻刻は、令和7年に出版を予定しており、本研究課題を総括するとともに、演劇のみならず、広義の占領期文化史を実証する資料として発信する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 後藤隆基	4. 巻 21
2. 論文標題 倉林誠一郎研究序説：制作者がみた新劇史に関する予備的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教大学日本学研究所年報	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 後藤隆基
2. 発表標題 倉林誠一郎とは何者か：旧蔵資料と日記の意義
3. 学会等名 シンポジウム「占領下新劇裏表：倉林誠一郎日記を読む」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 神山彰
2. 発表標題 横断的に見る倉林誠一郎日記：興行としての新劇
3. 学会等名 シンポジウム「占領下新劇裏表：倉林誠一郎日記を読む」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 児玉竜一
2. 発表標題 映画からみる倉林誠一郎日記
3. 学会等名 シンポジウム「占領下新劇裏表：倉林誠一郎日記を読む」
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	児玉 竜一 (Kodama Ryuichi) (10277783)	早稲田大学・文学学院・教授 (32689)	
研究 分担者	神山 彰 (Kamiyama Akira) (20287882)	明治大学・文学部・名誉教授 (32682)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------